

学 位 論 文 の 要 旨

学位記番号	※第 甲 53 号	氏 名	佐 藤 由 佳
論文題目	『源氏物語』現代語訳の研究		
<p>古典文学の普及には、その現代語訳の果たす役割がきわめて大きい。</p> <p>本論文は、近代以降に行われ、現代においても陸続と刊行されている『源氏物語』の現代語訳について、時間軸に沿ってその外形を書誌的に明らかにするとともに、内実としてのそれぞれの特質と経緯とを探ることにより、『源氏物語』現代語訳の全体像を明らかにすることを第一の目的とする。さらに、それらの成果を踏まえて、将来にむけた古典文学の現代語訳のあり方について考察し、実践を交えた提言を行うことを第二の目的とする。</p> <p>本論文は四部十四章からなる。その構成は、序、第一部『源氏物語』現代語訳書誌集成、第二部『源氏物語』現代語訳の比較検討―〈完訳〉を対象として―、第三部「与謝野晶子による『源氏物語』現代語訳」、第四部『源氏物語』現代語訳の限界と可能性―まとめに代えて―、跋とする。</p> <p>序では、本研究の意義と論文の構成とを示した。</p> <p>第一部では、明治以降令和二年に至る『源氏物語』現代語訳の書誌を集成した。まず、「凡例」において、調査方針、掲出方法、掲出内容および構成などについて示した。そして、調査対象を、訳出形態により、〈完訳〉編、〈全訳〉編、〈抄訳〉編、〈意識〉編、〈翻案〉編、〈その他〉編に分類し、刊行年月日に沿って訳者ごとに掲出すること、また、訳者ごとに《単行本》、《叢書》、《文庫本》に分類することとした。掲出書誌は、書籍名、巻数、出版者（出版社）、刊行年月日、書籍サイズ、一頁行数、一行字数、（可能な範囲での）書影、解説とした。さらに、〈完訳〉編については、「桐壺」巻冒頭部の現代語訳本文（訳文）も掲げた。</p> <p>〈完訳〉編は、原文に概ね忠実であり、同一人により五十四帖すべての帖を口語体で訳しているものを対象とし、明治四五年二月に刊行が開始された与謝野晶子『新譯源氏物語』（金尾文淵堂）にはじまり、令和二年二月に刊行を終えた角田光代『源氏物語』（河出書房新社）までを取り上げた。〈完訳〉編に掲げた訳者は二人である。一人の訳者が複数回現代語の訳業をなしているもの、一つの現代語訳に対し複数の刊行をみるものもある。それらの中でも代表的なものは、与謝野晶子と谷崎潤一郎である。与謝野晶子は、合計二回の訳業を成し、『新譯源氏物語』と『新新譯源氏物語』を刊行した。『新譯源氏物語』としての刊行回数は一、『新新譯源氏物語』としての刊行回数は、二四にのぼる。谷崎潤一郎は、〈旧訳〉と称する『源氏物語』、〈新訳〉と称する『源氏物語』、〈新々訳〉と称する『新々訳源氏物語』の合計三回の現代語訳を完成させた。それらは、それぞれ複数回にわたり装丁などを変えながら一貫して中央公論社（中央公論新社）から刊行されている。その数は、〈旧訳〉が二回、〈新訳〉が五回、〈新々訳〉が一回である。その他、最初に単行本として刊行したものを、文庫本として再度刊行する際に、増補や改訂等を施した上で刊行するものもある。それらに該当するのは、円地文子と林望である。</p> <p>〈完訳〉編で取り上げたそれぞれの訳者ごとの刊行回数は次のとおりである。与謝野晶子は、四三回。吉澤義則は、三回。谷崎潤一郎は、一八回。窪田空穂は、二回。佐成謙太郎および玉上琢彌は、それぞれ一回。円地文子は、三回。今泉忠義は、三回。おのりきぞう、秋山虔および中田武司は、それぞれ一回。中井和子は、二回。瀬戸内寂聴は、三回。尾崎左江永子、大塚ひかり、上野榮子は、それぞれ一回。林望は、二回。荻原規子、小林千草・千草子、中野幸一および角田光代は、それぞれ一回。よって、〈完</p>			

様式 B

訳) 編で取り上げた刊行書籍は合計で九一におよぶ。

〈全訳〉編は、同じく原文に概ね忠実であり、全訳を試みているが、途中で断念したもの、完訳ではあるが単一訳者により完遂できなかったもの、もしくは当初より分担訳業が企図されたものとし、窪田空穂と与謝野晶子が分担訳業をなした《現代語譯國文學全集》『源氏物語』をはじめとし、完訳を目指しながら志半ばで他界した五十嵐力『昭和完譯 源氏物語』などを取り上げた。取り上げた刊行書籍の合計は、一〇である。

〈抄訳〉編は、五十四帖中の限定された帖および要所について原文に概ね忠実に訳されたものとし、舟橋聖一による《世界名作全集》『源氏物語』や、現代語訳のみならず原文を同時に収載する形式をとる瀬戸内寂聴や岩佐美代子らの書籍を取り上げた。取り上げた刊行書籍の合計は、一〇である。

〈意識〉編は、原文の一語一句にとられることなく、物語のあらすじをたどり、かつ作品の独自性を知りうるように訳されたものとし、大正、昭和、平成にわたって刊行された吉井勇によるものをはじめ、若年者向けの〈意識〉を刊行した木俣修、高木卓、福田清人などを取り上げた。取り上げた刊行書籍の合計は、五六である。

〈翻案〉編は、二次的創作ながら、原作のおもかげを十分にとどめている文学作品を対象とし、特定の登場人物の視点から描くなど『源氏物語』に関する多くの作品を残した田辺聖子をはじめ、橋本治『窯変 源氏物語』もここに分類し取り上げた。取り上げた刊行書籍の合計は、三四である。

最後に、以上の五分類には該当しないが、『源氏物語』現代語訳を考える上で見過ごすことのできない作品を〈その他〉編とし、アーサー・ウェイリーの英語翻訳版を日本語に訳した佐復秀樹、毬矢まりえ・森山恵などを取り上げた。取り上げた刊行書籍の合計は、三である。

なお、この六編に掲げるには至らなかったが調査段階で閲覧した刊行物について【閲覧文献一覧】として列挙するとともに、『源氏物語』現代語訳書誌集成の作業にあたり今後の課題として残った事項について「残された課題」と題し付記した。

第二部『源氏物語』現代語訳の比較検討—〈完訳〉を対象として—では、第一部の『源氏物語』現代語訳書誌集成の〈完訳〉編で取り上げた二人の現代語訳の内容について比較検討した。第一章では、比較検討の方法を示した。第二章では、それぞれの訳者ごとに「訳者の略歴」、「書誌」、「桐壺」巻頭部の訳文」を掲げ、訳文の検討をするにあたっては、まず「依拠本文」について調査のうえ確定し、または周辺資料からの推察を行なった。その上で、「桐壺」巻頭部におけるそれぞれの訳文の特質を導き出した。第三章では、第二章で導き出した「桐壺」巻頭部における特質からみる評価を、それぞれの訳者ごとにまとめた。

第三部「与謝野晶子による『源氏物語』現代語訳」では、与謝野晶子の訳業を特に取り上げた。与謝野晶子によりはじめての現代語訳が試みられたこと、また、それを契機にその後多種多様な人材によって陸続と現代語訳が試みられていること、さらに晶子の現代語訳が現在に至るまで多くの読者を獲得し続けていることが、その理由である。第一章では、与謝野晶子によってなされた『新譯源氏物語』と『新新譯源氏物語』の概要を示し、特に『新譯源氏物語』の刊行意義の大きさを指摘した。第二章では、その『新譯源氏物語』の出版動機および経緯を明らかにし、さらに神野藤昭夫氏の研究により導き出された『新譯源氏物語』「下巻の二」の訳出文字数割合増加について考察した。神野藤氏は、訳出文字数増加の理由を「心の底で晶子を突き動かす何物か」と言及していたが、その「何物か」とは、「宇治十帖」の「小説」としての構成のおもしろさ、さらに「東屋」巻以降の「技巧」や「内容」のすばらしさに対する晶子の高い評価と共感ゆえであったろうと意義づけた。第三章では、与謝野晶子が、前人未到の口語体による現代語訳という偉業にどのようにして取り組んだのかという点について、その文体に着目し、詳細に考察した。その結果、『新譯源氏物語』の文体は、晶子の強烈な個性に基づきつつも、当時の文学

様式 B

者たちの文体的潮流と、直訳型ではない新しい外国語文学翻訳者たちの文体との影響を大きく受けつ、あるいは、それらを晶子が積極的に摂取することによって成立したのではないかという見通しを立てることができた。その関連で森鷗外・上田敏との交流についても触れた。

第四部『『源氏物語』現代語訳の限界と可能性—まとめに代えて—』では、将来に向けた『源氏物語』現代語訳のあり方について考えた。第一章では、既往の現代語訳にもそれぞれの長所とともに、それぞれの限界があることを指摘し、今後はさらにきめ細かく読者を限定（想定）しながらの現代語訳が必要なのではないかという方向性を提起した。第二章では、第一章の問題提起に答えるかたちで、一一歳から一二歳という少年少女を読者対象として『源氏物語』「御法」巻の現代語訳を自ら試みた。一一歳から一二歳を選択した理由は、平成二九年三月三十一日に告示され、本年四月一日に施行された小学校学習指導要領「国語」【第五学年及び第六学年】（3）の古典について明記された事項にあるとおり、当該年齢層は古典について学び始めるにふさわしい年齢であるからである。また、与謝野晶子、円地文子、瀬戸内寂聴、古くは菅原孝標女もこの年齢で『源氏物語』の読者になった事実が認められているからでもある。一一歳から一二歳という、はじめて古典にふれる当該年齢層には、ある程度の説明を予めおく必要性があることから、凡例にかわる詳細な「まえがき」を記して、古典作品読書の導入とした。「御法」巻を選択したのは、千年前からかわらない人間の心の動きという『源氏物語』の魅力を存分に味わえる巻と考えるからである。死にゆく人と残された人との心の交流を描いているのが「御法」巻である。この現代語訳は、原文の情緒を味わえるよう解説などはあえて付さず、語りの文体を生かしてリズムカルに読み進められるようにした。よって、読み聞かせにも活用できるように工夫した。

跋では、本論文を概観し、本研究の今後の課題について言及した。

〈付記〉

第一部は、『源氏物語 現代語訳書誌集成』として、2020年9月22日付けで新典社から刊行された（A5判・328頁・9600円（税別））。